

VI) 病害虫発生経過の概要及び発生原因の解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
イネ	いもち病	葉いもち 遅い、 穂いもち やや早い	葉いもち 平年並、 穂いもち やや少ない	葉いもちの初発生は6月20日と遅かったが、全般発生は6月第6半旬と平年並みであった。7月に入ると病勢進展が活発化し、巡回調査圃場における発生圃場率は21.4%（前年8.6%）、発病株率が8.3%（前年3.1%）となり、発病度は過去5か年では最も高くなった。しかし、梅雨明け以降、病勢は急速に衰え、緩慢となった。穂いもちの初発は平年に比べてやや早かったが、発生圃場率が11.0%（平年25.4%）、発病率は0.4%（平年2.2%）となるなど、全般の発生量はやや少なくなった。	6月第3半旬以降7月第4半旬まで、BLASTAMIによる感染好適日が県内各地で出現した。特に6月のべ出現回数は過去20年で最も多かったH20年度の1.6倍となった。7月に入っても第2半旬を除いてその出現頻度は平年値を常に上回り、葉いもちの発生量は過去5か年では最も高くなった。しかし、梅雨明け以降は、一転して降雨頻度が少なく、高温で経過したため、上位葉での病斑形成は少なくなった。このため、穂いもちの発生がやや少なくなったものと考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ薬剤散布が行われた。
	紋枯病	遅い	少ない	初発生は平年よりも10日遅く6月25日に認められた。その後の病勢進展も全般に緩慢で、例年、上位進展が活発な極早生種栽培圃場でも、止葉葉鞘にまで病斑形成が及んだ圃場はあまり認められなかった。主要品種コシヒカリを含む全般の発生量は、発生圃場率27.5%（平年45.5%）、発病株率5.6%（平年9.3%）と平年に比べて少なかった。	生育初期の低温、日照不足により、主要な品種で茎数が少なくなったこと、最高分けつ期以降、降雨頻度が少なく経過したことから、全般にわたって病勢進展が緩慢になったものと考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ出穂期までに薬剤散布が行われた。
	縞葉枯病	—	平年並	6月22日に極早生種ハナエチゼンで初発が確認された。この後、各地でゆうれい症状を呈する被害株が認められたが、1圃場当たりの発病株数は数株程度であった。巡回調査における発生圃場率は0.1%で、昨年度の1.7%、22年ぶりに広域的多発生となった一昨年度の16.9%と比較すると顕著に低下し、全般の発生量は平年並みとなった。また、再生稲における発病株率も0.1%を示し、昨年度の1.9%、一昨年度の29.6%を大きく下回り、立毛時の発生状況を反映した結果となった。	4月に捕獲されたヒメトビウンカの保毒虫率は7%程度であったが、越冬世代～第1世代の発生量が昨年度より少なかったことに加え、6月の水田への飛来数がほぼ平年並みに留まったことから、本病の発生量は昨年度、一昨年度に比べて減少し、平年並みになったものと考えられる。	一昨年度、縞葉枯病が多発生した地域においては、本年度も引き続き箱施薬剤及び本田散布剤の施用により媒介虫のヒメトビウンカに対する防除が精力的に行われた。
	苗立枯病	—	やや多い	ビシウム属菌によるむれ苗症状が県内各地で認められ、育苗施設によっては発病程度の高い事例も確認された。	主たる育苗期である4月第2～6半旬にかけて気温が低く推移したため、ビシウム属菌による苗立枯れが助長されたものと推察される。	予防的な薬剤処理が行われた。
ニカメイガ 第1世代 第2世代	— —	平年並 少ない	予察灯及びフェロモントラップにおける誘殺数は極めて少なく、発蛾最盛期は判然としなかった。全般に圃場における被害は第1世代、第2世代ともに少なかったが、晩生種および直播栽培圃場の一部で食入被害が散見された。	近年、発生量は少なく、育苗箱施薬などの防除対策が行われたため、発生が抑えられたものと考えられる。	育苗箱施薬が行われた。被害常発地帯では本田薬剤防除が行われた。	
セジロウンカ	やや早い	やや多い	予察灯での初飛来は平年に比べてやや早い6月第5半旬から認められた。6～7月の飛来量は2479頭（平年比462%）でやや多く、7月14日には一晩で2000頭規模の大量飛来が確認された。これに由来する幼虫は7月中旬から発生し、県西部を中心に圃場内密度が高まった。全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	今年は県西部の飛来量が多く、海岸部の一部圃場では成幼虫密度が高まったと推察される。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、長期残効型箱剤の施用面積も拡大している。また、出穂時に穂いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。	
トビイロウンカ	平年並	平年並	予察灯での6～7月の飛来量はほぼ平年並みであった。これに由来する幼虫は7月下旬から発生し、全般の発生量は平年並みであった。8月下旬の第2世代成幼虫密度はほぼ平年並み（頭数2.0頭/25株、圃場率52.2%、平年2.5頭、21.1%）で経過した。坪枯れは本土側では少なかったが、隠岐地域では中生種きぬむすめを中心に被害が発生した。	9月以降も気温が高く経過し、次世代の増殖に好適な状況が続いたことと中生種を中心に坪枯れ被害が発生したと推察される。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、長期残効型箱剤の施用面積も拡大している。また、出穂時に穂いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。	

	ヒメトビウシカ	平年並	平年並	6月下旬の払い落とし調査では虫数、発生圃場率ともに平年に比べてやや多かったが、全般の発生量は平年並みで経過した。	越冬量は平年並みであったと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、発生が多かった地域では6月下旬から本田防除が行われた。また出穂時にはいもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	ツマグロヨコバイ	平年並	平年並	払い落とし調査では全期間を通して虫数、圃場率ともほぼ平年並みで、吸汁害やすす病などの発生は少なかった。	越冬量は平年並みであったと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時にはいもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	斑点米カメムシ類	平年並	やや少ない	畦畔雑草すくい取り（6月下旬：頭数2.1頭/10回振・発生圃場率35%、前年0.9頭・25%）はほぼ平年並み、極早生品種出穂時（7月下旬：1.7頭/20回振・50.0%、前年4.6頭・83.3%）、早生品種出穂時（8月上旬：2.1頭/20回振・56.5%、前年7.2頭・74.73%）の各調査では発生量は平年に比べてやや少なく、全般の発生量はやや少なく経過した。主な発生種はホソハリカメムシ、アカスジカスミカメであった。	発生要因として、昨年の発生量は平年並みで、越冬量も平年並みであったと推察される。	発生に応じて穂揃い・乳熟期～糊熟期に薬剤散布が行われた。カメムシ防除を兼ねた長期残効型薬剤の施用面積も拡大している。
	イネミズゾウムシ	やや遅い	やや少ない	予察灯における越冬世代成虫の初誘殺は、平年に比べてやや遅い5月第4半旬に認められた。5月下旬の巡回調査では、虫数、発生圃場率、被害度ともに平年に比べて少なかった。新成虫の誘殺数が平年に比べてやや多かった。	越冬量の減少と本田初期害虫との同時防除で近年発生が抑制傾向にある。	育苗箱施薬が行われた。多発田では本田防除が行われた。
	コブノメイガ	平年並	やや少ない	予察灯での飛来量は平年並みであった。巡回調査では虫数は平年に比べてやや少なく、被害株率もやや少ない～平年並みであった。白変葉の発生は海岸部の一部圃場で散見されたが、全般に少なかった。	今年の飛来量は少なく、海岸部を中心に幼虫による被害が発生したと推察される。	育苗箱施薬が行われた。多発田では本田防除が行われた。
ムギ	さび病	—	少ない	コムギでは収穫期に発生が確認されたが、発病程度は低く、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	—	本病を対象とした防除は特に行われなかった。
	赤かび病	—	やや少ない	発病程度は低く、平年に比べて発生量はやや少なかった。	出穂期以降、降雨頻度が少なく低温傾向となったため、子のう胞子の飛散等が抑制されたものと考えられる。	ムギの種類に応じて出穂期以降、薬剤散布が実施された。
	うどんこ病	—	少ない	病勢は緩慢で、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	近年発生が少ないことから、伝染源量が少ないものと考えられる。	他の病害との同時防除が行われた。
ダイズ	ハウモンヨトウ	平年並	やや多い	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬までやや少なかった。その後、9月2、3半旬に大量の飛来があり、本種幼虫による被害の多発が予想されたため9月17日付けで注意報を発表した。圃場での幼虫の発生は平年並みの8月第4半旬からみられ、1a当たりの白変葉箇所は9月末には2.7箇所であり、平年（2.0箇所）よりやや多い発生であった。	成虫の飛来量は当初がやや少なかったが、9月半ばに急増した。また、9月の天候は気温が高く、降水量が少なかったため、本種の増殖に好適であった。これらの要因により、発生量がやや多くなったものと考えられる。	9月17日付けで注意報を発表し、的確な防除を促した。発生地では被害拡大防止のため薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	圃場での発生はほぼ平年並みであった。発生の主体はダイズアブラムシであった。	—	—
	吸汁性カメムシ類	平年並	平年並	圃場での発生はほぼ平年並みであった。	—	集団転作圃場以外では防除はほとんど行われなかった。
ナシ	黒斑病	平年並	少ない	初発は4月26日で平年並みであった。全般の発生量は、6月下旬までは平年並みで推移したが、7月下旬以降は少ない発生であった。	梅雨明け以降は降雨が少なかったために発生量が少なくなったと考えられる。	袋かけ時期を中心に薬剤散布がよく行われた。以後、収穫期まで薬剤散布が行われた。
	黒星病	早い	やや多い	初発は4月26日で平年と比べて早かった。全般の発生量は平年と比べてやや多かった。	4月は降雨が多く、子のう胞子および分生子の飛散、感染が助長されたと考えられる。また、近年、発生量がやや多い傾向が続いているため、越冬菌量が多かったと考えられる。	開花期から袋かけ期を中心に薬剤防除が行われた。

ハダニ類	平年並	やや少ない	ハダニ類の発生量は4月下旬の花叢への寄生率は平年並みであったが、その後発生は少なくなった。全般の発生量はやや少ない発生となった。	カンザワハダニの越冬量はやや少なかったが、4月下旬にクワオオハダニの花叢への寄生がみられ平年並みとなった。その後、5～7月中旬までは降雨も多くやや少なく推移した。8月以降は気温が平年より高く推移し、ハダニ類の発育適温より高くなったため、やや少ない発生になったと考えられる。	5月下旬～6月、7月上旬、8月上中旬を中心に薬剤散布が行われた。	
モモシンクイガ	平年並	平年並	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期は平年並みであった。誘殺数、果実被害は全般に平年並みであった。	前年の発生がやや多く、越冬世代成虫の発生量がやや多かったと考えられるが、その後降雨も多く発生量は平年並みとなった。また、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなった。	ナシヒメシンクイ、ハマキムシ類との同時防除が行われた。	
ナシヒメシンクイ	平年並	平年並	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期は平年並みであった。誘殺数は越冬世代ではやや多かったが、その後平年並みとなった。果実の被害は全般には平年並みであった。	3月中下旬、4月は気温が高かったが、越冬世代成虫の発生時期は平年並みであった。越冬量がやや多かったが、5～7月まで降雨が多く発生量は平年並みになったものと思われる。また、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	小袋掛け前に他害虫との同時防除が行われた。	
アブラムシ類	平年並	やや少ない	4月下旬の寄生梢率、寄生程度は平年並み、5月下旬には寄生新梢率、寄生程度ともやや少なかった。全般の発生量はやや少なかった。	4月中旬の気温がやや高く経過したが、発生時期は平年並みであった。その後、降雨等の影響により発生がやや少なく推移したものと考えられる。	5～6月に薬剤散布が行われた。	
ハマキムシ類	平年並	やや少ない	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、平年並みであった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、幼虫による被害もやや少なかった。	4月上旬の気温はやや低かったが、越冬世代の発生時期は平年並みであった。5月、6月の気温はやや低く推移し、第1世代以降の発生もやや遅く、発生量も少なくなった。	他害虫との同時防除が行われた。	
クワコナカイガラムシ	—	少ない	全般の発生量は少なかった。	—	防虫果袋が使用された。	
カメムシ類	平年並	多い	フェロモントラップでは5月14日に、予察灯では5月11日から誘殺された。その後、フェロモントラップ、予察灯ともに6月下旬から急激に誘殺数が増加し、8月下旬まで高水準が続いた。有袋栽培においても一部の圃場で被害が認められ、全般の発生量は平年に比べて多かった。	越冬量が多かったことに加え、本年はヒノキの花粉飛散量から蓇果はやや少ないと推定され、圃場への飛来量が多くなったものと考えられた。薬剤防除は7月中旬から8月下旬までの間に精力的に実施されたが、散布回数が少ない一部の圃場では被害が多かった。	7月7日付けで注意報を発表し、防除対策の周知徹底を図った。	
カキ	炭疽病	—	やや多い	全般の発生量は平年と比べてやや多かった。	梅雨時期に降雨が多く、発生量がやや多くなったと考えられる。	梅雨時期と8月下旬～9月を中心に薬剤散布が行われたが、梅雨時期は降雨日数が多く薬剤散布が遅れた圃がみられた。
	うどんこ病	平年並	少ない	6月下旬に初発を確認した。発生量は、6月下旬までは平年並みであったが、7月下旬以降少なく推移し、全般の発生量は、平年に比べて少なかった。	7～9月までの気温が高く推移し、特に8月下旬～9月中旬の気温が下がらず、発病が抑制されたと考えられる。	8月下旬～9月を中心に薬剤散布が行われた。
	カキノヘタムシガ	平年並	平年並	果実の被害は一部で多発生圃場が認められたが、全般の発生量は平年並みであった。	防除効果の高い薬剤が適期に散布されたためと考えられる。	各世代発生期に薬剤散布が行われた。
	ハマキムシ類	平年並	やや少ない	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、平年並みであった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、幼虫による被害もやや少なかった。	4月上旬の気温はやや低かったが、越冬世代の発生時期は平年並みであった。5月、6月の気温はやや低く推移し、第1世代以降の発生もやや遅く、発生量も少なくなった。	他害虫との同時防除が行われた。
	カキクダザミウマ	やや遅い	平年並	5月15日に被害捲葉の発生を認めた。発生量は平年並みであった。第1世代成虫は6月第3半旬から粘着トラップに誘殺され、誘殺数は平年並みであった。果実被害は7月中旬からみられたが、被害量はやや少なかった。	越冬成虫の飛来量が平年並みであったこと、成虫飛来時期の薬剤散布と被害捲葉の除去などの防除対策により、果実被害の発生量はやや少なくなったものと考えられる。	越冬成虫飛来期の薬剤散布と捲葉の切除が行われた。

	カメムシ類	平年並	多い	フェロモントラップでは5月14日に、予察灯では5月11日から誘殺された。その後、フェロモントラップ、予察灯ともに6月下旬から急激に誘殺数が増加し、8月下旬まで高水準が続いた。被害果実は7月下旬から認められ、平年に比べて多かった。	越冬量が多かったことに加え、本年はヒノキの花粉飛散量から結果はやや少ないと推定され、圃場への飛来量が多くなったものと考えられた。薬剤防除は7月中旬から8月下旬までの間に精力的に実施されたが、散布回数が少ない一部の圃場では被害が多かった。	7月7日付けで注意報を発表し、防除対策の周知徹底を図った。
夏秋キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	巡回調査地点での発生量は生育期間全般を通じてやや少なかった。	食葉性害虫等により葉の傷害が目立ち、感染に好適な状況を呈する圃場も一部でみられたが、全般には近年発生量がやや少ない～少ないことから、伝染源量が減少し、発生が抑制傾向にあるものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	やや少ない	収穫期には発生が認められたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	結球期に降雨が少なく、高温傾向に推移したため、感染がやや抑制されたものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	平年並	やや多い	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬までやや少なかった。その後、9月2、3半旬に大量の飛来があり、本種幼虫による被害の多発が予想されたため9月17日付けで注意報を発表した。圃場での幼虫の発生は9月上旬からみられ、9月半ばには寄生株率が10.0%と平年の約3倍となった。その後、9月末には6.7%とほぼ平年並みとなった。全般の発生量はやや多かった。	成虫の飛来量は当初がやや少なかったが、9月半ばに急増した。また、9月の天候は気温が高く、降水量が少なかったため、本種の増殖に好適であった。これらの要因により、発生量がやや多くなったものと考えられる。	9月17日付けで注意報を発表し、的確な防除を促した。発生地では被害拡大防止のため薬剤散布が行われた。
	コナガ	—	少ない	幼虫の発生量は全般に少なかった。	—	定植時の粒剤施用と、その後は他のチョウ目害虫との同時防除が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	発生量は全般に平年並みであった。発生の主体はモモアカアブラムシとニセダイコンアブラムシであった。	—	定植時に粒剤施用が行われた。
冬キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	発生圃場は僅かで、発病程度もやや低く、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	近年発生量がやや少ない～少ないことから、伝染源量が減少し、発生が抑制傾向にあるものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	やや少ない	県各地で発生がみられたが、発病程度はやや低く、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	—	薬剤による防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	平年並	やや多い	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬までやや少なかった。その後、9月2、3半旬に大量の飛来があり、本種幼虫による被害の多発が予想されたため9月17日付けで注意報を発表した。圃場での幼虫の発生は定植直後の9月上旬からみられ、寄生株率は平年に比べて高く、全般の発生量はやや多かった。	成虫の飛来量は当初がやや少なかったが、9月半ばに急増した。また、9月の天候は気温が高く、降水量が少なかったため、本種の増殖に好適であった。これらの要因により、発生量がやや多くなったものと考えられる。	9月17日付けで注意報を発表し、的確な防除を促した。発生地では被害拡大防止のため薬剤散布が行われた。
	コナガ	—	少ない	幼虫の発生量は全般に少なかった。	—	定植時の粒剤施用と、その後は他のチョウ目害虫との同時防除が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	発生量は全般に平年並みであった。発生の主体はモモアカアブラムシとニセダイコンアブラムシであった。	—	定植時に粒剤施用が行われた。
タマネギ	白色疫病	—	やや多い	3月下旬には県内各地で発生がみられ、発病程度の高い圃場も散見された。盛期の発生量は平年に比べてやや多くなった。また、発生期間も5月上旬までとやや長期に及んだ。	発生期間がやや長期に及んだのは、例年気温の上昇により病勢が鈍化する4月中旬以降も低温傾向が続いたため、終息せず、感染が継続したためと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	べと病	早い	やや多い	3月下旬における越冬罹病株の発生量は18.9株/1万株(平年1.7株/1万株)と過去10年で最も高くなった。その後、病勢はやや鈍化した。二次感染株の発生量は平年に比べてやや多かった。	11月第1～4半旬に降雨量がやや多く、高温で推移したことから、育苗期間中の感染が助長され、越冬罹病株の多発生に繋がったものと推察される。	4月5日付けで注意報を発表し、越冬罹病株の抜き取りと的確な薬剤散布を促した。発生地では二次感染防止のための薬剤散布が行われた。
	さび病	—	平年並	収穫期に発生がみられたが、全般の発生量は平年並みであった。	—	本病を対象とした薬剤散布は行われなかった。

イチゴ	灰色かび病	—	やや多い	県内各地で発生が認められ、発病程度のやや高い圃場も散見され、全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	3月は気温が高く、4月は低めに推移し、感染に好適な条件が続いたため、発生がやや多くなったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	少ない	促成、半促成栽培における発生量は全般に少なかった。	前年秋期のアブラムシ類有翅虫の飛来数はやや多く、冬季の気温も高めに推移し、本種の発生には助長的であった。しかし、定植時に本種に卓効の薬剤が使用されたため、発生量は少なくなったものと考えられる。	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は2009年8月下旬まで平年並みであった。その後、累積誘殺数は9月末には東部、西部とも平年の5割程度になった。圃場での幼虫の発生は9月下旬頃からみられ、全般にはやや少ない発生であった。	成虫の飛来量がやや少なかったため、幼虫の発生量はやや少なくなったものと考えられる。	定植時の粒剤施用と、その後は発生に応じて薬剤散布が行われた。
キク	アブラムシ類	—	平年並	発生量は全般に平年並みであった。発生の主体はワタアブラムシであった。	—	定植時に粒剤施用が行われ、その後は発生に応じて薬剤散布された。